

編集後記

“亡羊の嘆”という言葉がある。多岐亡羊とも言うことは、御承知のとおりである。

早期胃癌診断学のような、多数の研究者の関心を持続的に保っている領域においても、この“亡羊の嘆”がある。この sm 胃癌にしても、たとえ文献を読みあさっても、あまりにも解決への道が遠いという嘆きもある。あるいは、研究の手段が同じで、考え方を異にしない研究集団の中からは、大きな創造的な仕事が、意外にも生まれにくいということを示しているのかもしれない。

大塚久雄は、その著書「生活の貧しさと心の貧しさ」(みすず書房)において、“ただもう、自分自身の内面にあって、解決を押し迫ってくる問題と、解決への道が見出しえない状態、その二つのハサミ打ちにあって、何とか壁を突破して、逃れ出ようとものがき苦しむ、それは或る意味では耐えがたい苦しみです。しかし、あるとき幸運にも新しい着想が閃き、突如として道が開けてくる。”と述べている。

この sm 胃癌の 2 回目の特集に集められている症例の中から、Max Weber の言う Einfall が出現することを期待したい。症例の多くは、大多数の読者にとって反復可能な経験であるはずである。それにしても、“われわれには何とまあ多くの知らないことがあるのだろう”(小原 信:「状況倫理の可能性」)。

<竹本 忠良>

<編集> 早期胃癌研究会